三十卷本『水滸傳』について

氏岡眞士

『水滸傳』の版本は、しばしば繁本と簡本とに大別される。前者はさらに分卷本と不分卷本あるいは百回本・百二十回本・七十回本などに區分され、後者も插增本・嵌圖本・評林本はじめ多樣な存在が認められる。その詳細は後述するとして、これらのなかで異端兒といえば、本稿の主題となる三十卷本であろう。

それは簡本の一種と言われる。なるほど記述の分量は、いわゆる繁本よりずっと少ない。容與堂本の總字數およそ六十七萬三千字にたいして、半分以下の約三十一萬三千字にすぎないという試算もある（劉世德「《水滸傳》映雪草堂刊本―簡本和刪節本―《水滸傳》版本探索之一」、『水滸爭鳴』第四輯、一九八五年）。そして容與堂本に無い田虎王慶故事も含み、かつその部分の內容は基本的に他の簡本に類しており、百二十回本のそれとは異なっている。

ではなにが異端なのか。そしてその存在は、研究のうえで、何を意味するのだろうか。以下で考えてみたい。

一、三十卷本の概要

三十卷本『水滸傳』は、管見のかぎりパリ國立圖書館と東京大學文學部および同總合圖書館に各1部が所藏される。基本的に同版だが、パリ本は卷六第17葉までしか殘っておらず、また插圖（「水滸傳全像」）第7葉や、卷二第22葉bの大半を缺く。さらに眉批（各行3字）の上1字が、しばしば裁斷されて讀めない。だが以下に述べることからみて、相對的に初印本に近いであろう。

東大の2部はパリ本に無い版木の磨耗や斷裂まで一致する。共に基本的に完本だが、插圖のうち「又三」（第3～4葉のあいだ）・「又十」（第10～11葉のあいだ）・第20～21の計4葉が無いうえ、插圖最終葉の版心から葉數を示す數字（パリ本では「二十二」）を消している。卷十九末で「總評」の後半を載せるはずの第19葉も無い。總合圖書館本は卷三の冒頭2葉も缺き、破損は第8葉まで續くいっぽう、「大門通小傳馬三丁目／中屋幸三郎藏書記」・「□謂四□」の印が各冊第1葉に捺され、また「中田弃莠」と卷十末尾に署名され、おなじ筆跡の書きこみも隨處にみられる。

構成は、パリ本が封面・序・插圖・目錄をへて本文となるが、東大の2部は插圖を目錄のあとにおく。封面は、パリ本では「李卓吾原評／忠義水滸全傳／本衙藏版」とあり「寶翰樓章」の朱印を捺すが、東

大の2部は「李卓吾先生評／水滸全傳／金閶映雪草堂藏板」とあって「施耐庵原本」と眉す。寶翰樓・映雪草堂とも杜信孚『明代版刻綜錄』に見える（寶翰樓の性格については笠井直美「北京大學圖書館所藏『忠義水滸全傳』―「萬曆袁無涯原刊」情報の一人歩き」（『名古屋大學中國語學文學論集』第二十一輯、二〇〇九年）參照）。序は、パリ本が「水滸傳全本序」と題し全11葉半、半葉4行10字なのに對して、東大の2部は「水滸全傳序」全3葉、7行13字で、內容もパリ本の抄錄である。目錄は、パリ本が「文杏堂評點水滸傳全本／標目」と題して全20葉半、10行22字相當で各行に則目1つなのに對し、東大の2部は「金聖歎評水滸全傳」全12葉、9行18字で各行2則目を記しており、版木が節約されている。則目自體に異同は無い。ただし第四節で述べるように、本文と大きな食い違いがあり、初印に近いパリ本すら飜刻の可能性がある。插圖は3部とも共通し、各葉に數場面をあしらう獨特のものである。

本文は半葉10行22字で、版式はパリ本の目錄と共通する。版心は黑魚尾と白魚尾が混在し、上に「水滸傳全本」、下に卷數と葉數を記す。各卷とも「水滸傳全本卷之幾／元施耐庵編、明李卓吾評點」に始まり、本文の最後に「總評」を付して「水滸傳全本卷之幾」で終わる。ただ東大の2部は卷十以降、卷頭2行目は部分的に空欄となっている場合も目だち、しかも卷二十四では李卓吾ではなく「□堂主人評點」とする。また卷二十三は「總評」が無いまま第16葉b面最終行で終わるが、眉批や圈點・句點が無く版木も磨耗していないので、覆刻による補配であろう。そのさい評を省いて1葉を節約したと考えれば、前述の插圖や序・目錄などの樣子に符合する。このような補配は東大の2部の隨處にみられるが、べつに飜刻らしき補配もあり、各行をわかつ界線がめだち個々の字も小ぶりである。このうち卷二十六第3・4葉について第四節で檢討する。

パリ本に補配は無く、版木の磨耗も少ない。おそらく東大の2部は後修本であろう。本文に大きな異同は無いが、たとえば卷二12bの第5行でパリ本の「都」を東大の2部は「快」としており、つくりが「夫」のようになっているのは補配の結果だろう。以下では3部一括で三十卷本として論ずる。

二、底本をめぐる諸說

異端ぶりのひとつとして、三十卷本の本文は回を分けない。鄭振鐸「巴黎國家圖書館中之中國小說與戲曲」（『中國文學研究』人民文學出版社、二〇〇〇年。初出は一九二七年）以來、その代わりに受けのカギが付されているなどと言われてきたが、このカギ記號はかなり恣意的で、卷十三や卷二十三～二十九のように皆無の卷もある。回目はおろか則目も無く、講釋風の決まり文句も廢している。また插入詩の類も原則として無い點は、七十回本などもそうだが、やはり少數派に屬する。

阿部兼也「明代文簡本水滸傳をめぐる問題」（『集刊東洋學』第十二號、一九六四年）は、繁本第十三回（〝排印全傳本〟人民文學出版社、一九五五年）が描く楊志と周謹の試合の敍述を、三十卷本（卷四4b～5a）と余象斗の評林本（卷三10a～10b）を用いて對照している。そして簡略化の手法が違い、評林本が一文一文を少しずつ刈り込むのに對して、三十卷本は繁本なみに詳しいままの部分と全て削り去った部分とが混在すると指摘する。また三十卷本の田虎王慶故事は、百二十回本より評林本に似ているとも述べる。

大内田三郎「『水滸傳』版本考―『文杏堂批評水滸傳三十卷本』について―」（『天理大學學報』第百十九輯、一九七九年）は本文から18例を擧げて、三十卷本が繁本（『水滸全傳』作家出版社本）を刪節しており、かつそのやりかたが他の簡本（『百十五回本』・『志傳評林本』・『百十回本』・『百二十四回本』）と違うことを指摘する。そして底本は繁本のうち百二十回本であり、他の簡本が百回本に田虎・王慶故事を增補したのとは異なる、と斷ずる。三十卷本が移置閻婆を行なっており、かつ目錄の則目が田虎王慶故事について、百二十回本の回目の八割以上を踏襲するからである。

ちなみに移置閻婆とは、『水滸傳』を繁本・簡本とはべつの形で仕分けする特徵で、この言葉は百二十回本の「發凡」にみえる。百二十回本や七十回本は全體を卷に分けず、百回本にもそういう不分卷のものがあるが、これら不分卷の繁本では、閻婆母娘と宋江の出會いが劉唐下書の前に描かれる。ところが容與堂本に代表される分卷百回本や、三十卷本以外の簡本では、出會いが劉唐下書のあとになっている。こちらが本來の姿だが、その後の展開とのかねあいで不自然さがあるため、不分卷の繁本は出會いを「移置」したと考えられている。なお劉唐下書とは、劉唐が宋江に晁蓋の手紙を渡す話で、この手紙は宋江の閻婆惜殺しの伏線になっている。

劉世德「談《水滸傳》映雪草堂刊本的底本―《水滸傳版本探索》之一」（『明清小說研究』第二期、一九八五年）は、本文68箇所の對照例をあげて、三十卷本の底本は百二十回本ではなく百回本であり、のみならずそれは容與堂本、しかも後出の內閣文庫藏本系統のそれである、とまで絞り込んでいる。

對照例のうち注目されるのは、10字前後のまとまった字句を三十卷本と容與堂本・天都外臣本（ともに分卷百回本）が共有し、袁無涯刊本（百二十回本）には無いという26例である（p102～p103）。容與堂本と不分卷諸本のあいだでこのような相違の存在が、高山節也「佐賀鍋島諸文庫藏漢籍明版について―遺香堂繪像本忠義水滸傳―」（『汲古』第十三號、一九八八年）でも指摘されるが、それらは三十卷本がわざわざ補ったとも、偶然の一致とも考えにくい。

たとえば以下の傍線部が、百二十回本の第二十四回には無いという（容與堂本の引用は原則として、北京圖書館藏本を影印した『明容與堂刻水滸傳』上海人民出版社、一九七五年による）。

武松是個直性的漢子，只把嫂嫂相待，不想那婦人是個使女出身，慣會小意兒，亦不想那婦人一片引人的心。酒罷，送下樓來，那婦人道……

（三十卷本卷七5b）

武松是個直性的漢子，只把做親嫂嫂相待，誰知那婦人是個使女出身，慣會小意兒，亦不想那婦人一片引人的心。武大又是個善弱的人……當日吃了十數杯酒，武松便起身……都送下樓來，那婦人道……

（容與堂本第二十四回5a）

いくつかの不分卷系諸本で檢證してみると、たしかに傍線部が拔けている（百二十回宮內廳藏寶翰樓本・同郁郁堂本・百回芥子園本・同遺香堂本5b、同三大寇本5a。このうち、宮內廳藏寶翰樓本が「袁無涯刊本」に準ずることは前揭笠井論文參照。また三大寇本の引用は無窮會藏本による）。

もっとも26箇所のうち三十卷本卷九「見花榮頭勢不好」（5a。容與堂本第三十三回7b）は、不分卷系諸本にもみえるから擧例の誤りだが（百二十回本第三十三回7bなど。なお百二十回本の引用は以下、宮內廳藏寶翰樓本による）、ほかには卷十四「現在東京做金槍班教師」（5b）と卷十八「細欺雀舌香勝龍涎」（11a）が三大寇本に見える程度で（第五十六回1a、第七十二回8a）、劉說の擧例は概ね有效である。

劉說の弱點のひとつは、「袁無涯刊本」以外の不分卷系諸本が未檢討の點だろう。百二十回本から田虎王慶故事を削って不分卷百回本ができたという說が前提だが、それは笠井直美「李宗侗（玄伯）舊藏『忠義水滸傳』」（東京大學『東洋文化研究所紀要』第百三十一册、一九九六年）が不分卷系諸本の異同152箇所を檢討した結果、今ではほぼ完全に否定されているのである。笠井氏が說くように、不分卷本は百回本が百二十回本に先行し、かつ本文から2大別されよう。相對的に容與堂本に近い三大寇本（無窮會藏本など）と、互いに覆刻の關係にある「親戚グループ」（李玄伯舊藏本・遺香堂本・芥子園本、百二十回諸本）とである。なお無窮會藏本については談蓓芳「也談無窮會藏本《水滸傳》—兼及《水滸傳》版本的其他問題—」（『中國文學古今演變論考』上海古籍出版社、二〇〇六年。初出は二〇〇〇年）も詳論している。

とはいえ、劉說の擧例すべてを前述の不分卷系諸本5種で檢證しても、とくに否定的な材料は出てこない。せいぜい田虎王慶故事の增補による百二十回本の改訂に關わる5箇所（p101）が積極的な證據にならぬ程度である。もっとも三十卷本には刪節が多く、對應箇所を見出せぬ場合も少なくないが、ほかに笠井氏や談氏の擧例、また大內田三郎「水滸傳版本考—繁本各回本の關係について—」（『ビブリア』第四十號、一九六八年）や、白木直也『和刻本忠義水滸傳の研究』（著者自印本、一九七〇年）を手がかりに、分卷不分卷の異同を調べてみても、やはり劉說を覆すには至らない。

劉說の指摘しないパターンとして、分卷不分卷で文章の順序が逆になる例を補っておこう。「宋江三敗高太尉」の一節である。

三個先鋒催動船隻，把小海鰍分在兩邊，擋住小港，大海鰍船望中進發，迤邐來到梁山泊深處。宋江、吳用佈置已定，單等官軍船隻到來。

（三十卷本卷二十18b）

當下三個先鋒催動船隻，把小海鰍分在兩邊，當住小港，大海鰍船望中進發……迤邐來到梁山泊深處。宋江、吳用已知備細，預先佈置已定，單等官軍船隻到來。

（容與堂本第八十回13b）

宋江、吳用已知備細，預先佈置已定，單等官軍船隻到來。當下三個先鋒催動船隻，把小海鰍分在兩邊，當住小港，大海鰍船望中進發……迤邐來到梁山泊深處。

（三大寇本第八十回13a）

ちなみに、このような順序ちがいの大規模なものとして、王矮虎と扈三娘の結婚の描寫が有名である。それは第五十回と第五十一回とに重複して描かれるが、分卷本は第五十回で30字程度、第五十一回で200字程度なのに對し、不分卷本では字句をそのままに兩者をそっくり入れ替えている。つまり不分卷系では第五十回のほうが詳しく、第五十

一回は簡潔である（七十回本は各マイナス一回）。

だが三十卷本の場合、卷十二の末尾／卷十三の冒頭でそれぞれ、

次日又作席面，宋江主張一丈青與王矮虎作配，結爲夫婦。
／扈三娘與王英結爲夫婦，晁蓋、宋公明正飲宴間，只見……

とあるだけで重複は無く、表現も改變されているので、ここについては分卷不分卷のどちらに基づくとも言いがたい。

三、關勝の死にかた

劉說の結論自體は蓋然性が高いが、論證過程に弱點がまだ3つほど殘っており、ただちに依據はできない。分卷百回本のうち鍾伯敬批評本に觸れていないこと、三十卷本の卷二十三～卷二十八（田虎王慶故事）は百二十回本によると斷じたこと、そして三十卷本が移置閻婆している問題を棚上げしたことである。

このうち鍾批本については、劉氏にも「鍾批本《水滸傳》的刊行年代和版本問題—《水滸傳》版本探索之一」（『文獻』一九八九年第二期）があるが、大內田三郎「『水滸傳』版本考—『鍾伯敬批評水滸傳』について—」（大阪市立大學『人文研究』第四十六卷第九分册、一九九四年）のほうが詳しい。それによれば鍾批本は容與堂本が底本と目され、かつ內閣文庫藏本より北京圖書館藏本に近い。

容與堂本同士の顯著な異同として、第百回（2b）における關勝の死の描寫がある。これは劉說が內閣文庫藏本系統の容與堂本を三十卷本の底本と認める一證ともなっている。

關勝在北京大名府總官兵馬，甚得軍心，衆皆欽伏。一日操練軍馬回來，因大醉失腳落馬，得病身亡。呼延灼受御營指揮使……
（北圖藏本）

關勝在北京大名府總官兵馬，甚得軍心，衆皆欽伏。後來劉豫欲降兀朮，關勝執義不從，竟爲所害。呼延灼受御營指揮使……
（內閣文庫藏本）

後者のように、金への降伏に反對して死んだとするのは、他に鍾批本（2a）と三十卷本（卷三十8b）しか無い（表現はいずれも內閣文庫藏容與堂本と同じ。馬幼垣「關勝的死之謎」・「後記」、『水滸二論』三聯書店、二〇〇七年參照。「後記」の「白木直也」は「大內田三郎」の誤り。なお聯經出版二〇〇五年版には「後記」が無い）。ちなみに先祖の關羽も『三國演義』での死にかたに複數ある（中川諭「嘉靖本『三國志通俗演義』における「關羽の最期」の場面について」、東北大學『文化』第五十四卷第一・二號、一九九〇年）。

關勝の死にかただけみれば、三十卷本が鍾批本に基づく可能性もありそうだが、實際は大內田論文が指摘するように、鍾批本は北京圖書館藏の容與堂本と一致箇所が多い。つまり關勝の死を除けば、內閣文庫藏の容與堂本ほど三十卷本と親近性をもたないのである。したがって三十卷本の底本は、鍾批本ではなかろう。

四、田虎王慶故事の底本

劉世德「談《水滸傳》映雪草堂刊本的概況、序文及標目—《水滸傳版本探索》之一」（『水滸爭鳴』第三輯、一九八四年）は、三十卷本の目錄が全體としては百二十回本の回目に酷似するものの、田虎王慶故

事に關わる巻二十四の後半（第13則以降）から巻二十八最終則にかけてだけは、評林本の插圖に付された標題に類似すると指摘する。白木直也「瀧澤馬琴水滸畫傳「校定原本」著錄の刊本二種―後傳と李卓吾本―」（『東方學』第四十七輯、一九七四年）や陸樹崙「映雪草堂本《水滸全傳》簡介」（『水滸爭鳴』第四輯、一九八五年）にも、同様の指摘がある。

しかし劉說は、三十巻本の田虎王慶故事が本文についても百二十回本と基本的に一致すると斷じつつ、理由を明言しない。これはふたつの根據が拜察される。まず目錄の則目は大半が百二十回本の回目と酷似し、三十巻本巻二十二最終則「宋公明兵渡黃河」から巻二十四第12則「水軍汨沒破堅城」までの32則も百二十回本の第九十一～一百六回、つまり田虎故事と王慶故事の前半までとに對應することの心理的影響である。つぎに本文でも百二十回本に由來する部分が見つかる。それは巻二十六第3～4葉の880字である。

だがこの2葉は前後と様子がちがう。まず2b／3aは明らかにつながっていない。

自出營前贖藥，只見營前圍一賣卦金
／王慶見是賣卦的，他因有嬌秀事在心，又有昨日怪事，便叫，先生，這裡請坐。

これは第2葉が、たとえば、

便出營前贖藥，只見營前眾人圍一賣卦金劍先生李傑。這王慶乃姚西人也，身長七尺……

（評林本巻二十一2b）

のごとき底本を用い、第3葉は

兩旁有十六個小字寫道，荊南李助，十文一數，字字有准，術勝管輅。王慶見是個賣卦的，他已有嬌秀這樁事在肚裡，又遇著昨日的怪事，他便叫道，李先生，這裡請坐。

（百二十回本第一百二回2b）

のように別の底本を用いたことに由來するであろう。言い換えれば簡本と百二十回本とを、強引に繼ぎ合わせているのである。

他方4b／5aは、一見スムースにつながっている。

小可姓龔名端，還有一弟名正……弊村有個王達，倚著會使鎗棒，愚兄弟被他恃強欺壓……將出十兩銀子，送與公人孫琳、賀吉，要他再延數日……龔端道，都排全才出眾，
／眞是國家之寶……某有一弟喚做龔正，他現在永州市界上開酒店，有五年不相來往……在路不一日，來到攝子鎮。

だが第4葉は百二十回本を、第5葉は簡本を用いたと見られる。

小可姓龔單名個端字，這個是舍弟單名個正字……這個弊村……與彼村一個人喚做黃達，因賭錢鬥口，被那廝痛打一頓，俺弟兄兩個也贏不得……

（百二十回本第一百二回10b～11a）

龔端取出兩錠銀，各重五兩，送與兩個公人，求他再寬幾日。孫琳、賀吉得了錢，只得應允……龔端叫兄弟帶了若干銀兩，又來護送。於路無話，不則一日，來到陝州。

（百二十回本第一百三回2b～3a）

小人姓龔名端……見閣下槍法，眞是國家之寶……某有一弟喚做龔正，他如今在四路鎭上，屬永州界市上開酒店，如今五年不相來往……在路不一日，來到攝子鎭。

（評林本卷二十一4b，攝原作手字旁加耳，俗借爲攝字）

第3～4葉は、第一節で述べたように補配である。そのさいに百二十回本を使用した。そこには王慶が配流の途中で黃達と喧嘩になり、それを機に龔端・龔正と知り合う部分が含まれる。いっぽう簡本の王慶は、配流の途中で演武を披露して龔端と知り合い、別れに際して龔正を紹介され、かれを訪ねた先で黃達と喧嘩になる。紛らわしい面もあるが、やはり別の話である。繼ぎ合わせるさい表現や內容に手を加えており、たとえば隣村の黃達を我が村の王達に變えているのは、直後の6aで黃達が出てくるからだろう。

この2葉以外、卷二十三～二十八が簡本に基づくことは、卷二十二／二十三と卷二十八／二十九の接續を俯瞰しただけで窺える。

宋江……設宴餞別，金帛相贈。次日公孫勝打個稽首，望北登程去了。

／宋江寫畢，遞與吳用、公孫勝，看詞中語意，甚是悲哀。

（卷二十二39b／卷二十三1a）

公孫勝曰，隨兄日久，雖留何益。宋江設宴餞行，各以金帛相送。

／時值正旦，蔡太師奏過，只敎宋江、盧俊義兩個有職人員隨班朝賀……

（卷二十八22b～23a／卷二十九1a）

卷二十二末尾で宋江たちと別れたはずの公孫勝が、卷二十三冒頭では吳用と一緒に宋江の書いた詞を讀んでいる。つながり方も惡い。しかも卷二十二で對遼戰爭からの凱旋は終わっているのに、その凱旋が卷二十三でも繰り返される。やがて王慶との戰いに勝ち、凱旋した公孫勝が宋江たちと別れるのが、卷二十八の末尾である。

この奇妙な展開は、容與堂本でいえば第九十回9aに、簡本から田虎王慶故事を無造作に插入した結果である。さすがに卷二十三～二十八全體が補配とは觀察できない。だが卷二十九の「總評」（63b）が、次のように述べる點も看過できない。

宋先鋒平遼之後，席未暖，復請剿方臘，壯哉語……

遼を平らげてすぐに方臘征伐だと、田虎王慶故事など存在しないかの如く評していることは、陸樹崙前揭論文も注意している。それは評者が複數いることの示唆というより、田虎王慶故事が本來は無かったことの痕跡ではないか。卷二十九は評も含めて全64葉もあり、ざっと他の卷の倍以上になる。この卷を二つに分けたうえで、三十卷本から卷二十三～二十八を除くとちょうど全25卷になるのは、はたして偶然であろうか（第八節參照）。現存する三十卷本は3部とも先行するテキストの改版である可能性は、すでに第一節で述べた。

三十卷本の目錄と本文に食い違いがあることも既に述べた。目錄

は、巻二十四の後半（第13則以降）から巻二十八最終則までを除けば、百二十回本の回目をほぼそのまま則目に當てている。このうち田虎王慶故事以外の部分は、百二十回本と容與堂本の内容が基本的に同じなので、結果的に目錄もあまり齟齬しない。

だが巻二十三から巻二十四の前半について、百二十回本の田虎王慶故事の回目の八割を則目に利用して王慶故事に及んでいるのは、本文の對應箇所が簡本の田虎故事のみを縮約する以上、明らかにおかしい。そのあとは目錄だけ見ても、巻二十四の前半で王慶故事が始まったのに、後半から巻二十五の終わりまで再び田虎故事に關わる則目が竝ぶのは變である。ただ本文との關係で言えば、巻二十四第13則「宋江迎接瓊英郡主」は評林本巻十九19ａの畫題と同じであり、かつその本文は三十巻本巻二十四14ａに相當する。以下も類似の對應關係を示してゆくから、結局、三十巻本の目錄は巻二十三と巻二十四の前半がおかしいというべきかも知れない。いずれにせよ現存の三十巻本の目錄が、あとから付された疑いは濃い。

ところで三十巻本が用いた簡本として、便宜上ここまで評林本から擧例してきたが、これも嚴密には未知の簡本と言うべきである。そもそも目錄と畫題の關係からして、劉氏は前掲の『水滸爭鳴』第三輯所收論文で、全90例のうち評林本との完全一致は6割强だが、2割は完全に違うと指摘している。そして肝心の本文についても、現存の評林本に基づいたとは考えにくい部分がある。

馬幼垣「兩種插增本《水滸傳》探索—兼論若干相關問題—」（前掲『水滸二論』）は、簡本のうち插增乙本には有るが評林本には無い段落28箇所を取り上げて、他の簡本4種（劉興我本・映雪草堂本・北京圖書館藏本・二刻英雄譜本）での有無を調べている。第八節でも述べるように、插增乙本は簡本の系統において初期に位置し、評林本は萬曆二十二年（一五九四）の刊だが系統的に後出である。そこで上述の簡本4種はどちらに近いのかを、馬氏は探ろうとしたのだが、個別のデータの誤りや（たとえば第24例）、本稿が論じている三十巻本の底本問題へのナイーブさ（たとえば第19例）などがあり、直接依據することはできない（データの問題は氏の『插增本簡本水滸傳存文輯校—試行本—』嶺南大學中文系、二〇〇四年の評價にも關わるが、ここでは論じない）。

それでも問題の三十巻本（馬氏のいう映雪草堂本）巻二十三～二十八（田虎王慶故事）について、該當する22箇所（第4～25例）を檢證すると、9箇所において評林本には存在しない段落が認められる。そのひとつ、馬氏の第11例を見てみよう。

卻說關勝與唐斌寨中商議，攻魏州之計。唐斌道，日前葛延出戰，意若令人去求救兵，被我這裡殺了時鳳，乃回走入城，堅守不出。雖則四面攻打，其實沒奈他何。正說間，戴宗來到。

（插增乙本巻二十2ｂ）

卻說關勝與唐斌寨中商議，攻魏州之計。正說間，戴宗來到。

（評林本巻二十2ａ）

時關勝與唐斌計曰，前葛延出戰，意若令人去求救兵，不意時鳳死，乃回走入城，至今堅壁耳。乃戴宗至。

（三十巻本巻二十四20ｂ）

評林本が削った唐斌の發言内容は、わざわざ補うほどの内容とも考えにくく、他の簡本3種にも對應する記述が無い。三十巻本がそれに當

たる部分を持つのは、底本の違いを物語る。

このような部分が9箇所もある以上、三十卷本の田虎王慶故事の底本は、評林本そのものではあるまい。筆者は、評林本の前段階に改變の少ない余象斗による簡本『水滸傳』があったと推定している（「『水滸傳』と余象斗」、信州大學『人文科學論集〈文化コミュニケーション學科編〉』第三十八號、二〇〇四年）。なお插增乙本が底本でないことは、三十卷本では余呈が生け捕られ處刑されるまで活躍しており（卷二十七8a）、插增乙本のように早く謝英に斬り捨てられない（卷二十一25a）點からも明らかである。

ところで今みた例では、唐斌の發言內容を關勝との合議內容に變え、個別の表現も改めている。このような改變は第二節で紹介した王矮虎と扈三娘の結婚の描寫も、類例として擧げられよう。三十卷本以外でもそうだが、簡略化は單なる引き算ではない。この點が、移置閻婆の問題を考えるうえでも手がかりになる。

五、移置閻婆と開詞

三十卷本の本文は第二節で述べたように、田虎王慶故事以外については、內閣文庫藏本系の容與堂本にきわめて近い。ただそこでは移置閻婆をしていない。だからといって底本に、たとえば不分卷の三大寇本よりも分卷本に近く、移置閻婆だけ行なわれたテキストを想定することは難しい。容與堂本のなかでも內閣文庫藏本は後出の修訂本と考えられる以上（大內田三郎「『水滸傳』版本考―「容與堂本」について―」、『ビブリア』第七十九號、一九八二年。なお大阪市立大學『人文研究』第四十五卷第五分冊、一九九三年に續編あり）、そこに齟齬が生じてしまう。

とすれば三十卷本は、獨自に移置閻婆を行なったのではないか。わざわざそのような手間をかけるものかと疑問の向きもあろうが、簡略化が單純な引き算ではなく、改變を伴うことは前節でもみた。移置閻婆はもっと大規模だが、展開の不自然さを看過できなかったのであろう。百二十回本の「發凡」も移置閻婆に言及しており、この問題が當時、廣く認識されていたことを窺わせる。

三十卷本獨自の改變は他にもある。卷一冒頭に載せる「開詞」からして、他に類を見ない。

試看古今如箭，牽不住日月奔忙。草生才解凍，花落又飛霜。閒庭無事日偏長。爲歡處儘費端詳。今宵睡鄉。明朝醉鄉。悠悠忽忽莫追償。不關心底事，野老話興亡。拋撇玄纁玉帛，摩娑戈劍刀槍。笑官家誨盜，山河大寶，無計收藏。龍爭虎鬥自言强。正船到波心易漏，棋逢敵手難當。好烈烈轟轟做一場。麒麟閣上姓名香。告君行，把英雄事業仔細思量。

（思えば時の流れは矢のように速く、月日を留めることはできない。草木が芽生えやっと氷が解けたのに、花が散りまた霜が降る。靜かな庭で無爲に過ごせば一日はやたら長い。歡樂に精々力を注ぎ、今夜も、明日も醉生夢死で、漫然と過ごし省みることが無い。何事も關心の外にあって、年寄りの昔話などは尙更だ。だが豪華な贈り物に目もくれず、武器を取って戰おうとする人々もいたのだ。呆れたことに國家が惡事をはびこらせ、かけがえのない山河を、治められもしない。羣雄割據して力を誇る。ちょうど船は漕ぎ出してから水漏れが見つかり易く、圍碁は相手があるから中々勝てないようなもの。なんとも激しい戰いを經て、宮廷の

樓閣に末永く名を殘すのだ。別れに當たって、そんな英雄の生き様をよく考えてみてほしい。）

これに對して、內閣文庫藏の容與堂本はじめ多くの繁本が「引首」（七十回本では「楔子」）で冒頭に載せるのは、およそ以下のような詞である。

試看書林隱處，幾多俊逸儒流。虛名薄利不關愁。裁冰及剪雪，談笑看吳鉤。評議前王竝後帝，分眞僞佔據中州。七雄擾擾亂春秋。興亡如脆柳，身世類虛舟。見成名無數，圖形無數，更有那逃名無數。霎時新月下長川，江湖變桑田古路。訝求魚緣木，擬窮猿擇木，恐傷弓遠之曲木。不如且覆掌中杯，再聽取新聲曲度。

（見れば書物に埋もれて隱れ住むのは、多くの優れた知識人である。名利を離れれば何も心配は無い。詩文を彫琢して過ごすのみで、血氣にはやった少年とは違う。論じ合うのは歷代の帝王たちが、正統性を謳い中原を占め、各地に英傑たちが竝び立ち歷史を彩ったこと。興亡は柳のように搖れ動き、人生は小船のように頼りない。名を成す者や、肖像に殘る者も多いが、虛名を厭う者だって多いのだ。昇った月はやがて大河に沈み、江湖も桑畑や古道に變わる。武力で王道を求めるのは愚かだし、就職できれば赴任先は問わないといっても、傷ついた者はおかしな場所に遠ざけられてしまうだろう。それよりまずは手元の酒を飲み干し、そして新しい音曲が作られるのに耳を傾けよう。）

また三十卷本以外の簡本では、「引首」に相當する部分が第一回の前にある場合が多く、それは以下のように始まる。

詞曰，人稟陰陽二氣，仁義禮智天成。浩然沛乎塞蒼冥。可託六尺孤，能寄百里命。閑閱水滸全傳，論天罡地殺威名，逢場何辨僞與眞。赤心當報國，忠義實堪欽。

（詞にいわく、人は陰陽の二氣から生まれ、仁義禮智が備わる。浩然の氣を養い、隅々まで天地に滿ちる。それでこそ孤兒の若君も託せるし、諸侯の國の政治も任せられる君子人だ。水滸全傳を讀みながら、北斗や凶星の化身たちの威名を論じるなら、彼らは事に當たって理屈などにとらわれない。眞心から國に盡くす、その忠義こそが尊いのだ。）

繁本の詞が隱逸の樂しみを說くのに對して、三十卷本の詞は英雄との對比でそれを揶揄しており、他の簡本ともまったく異なる詞である。これも理論的には未知の底本の存在を考え得るが、そうではなく、繁本を踏まえつつ敢えて詞を書き換えたのであろう。三十卷本は第十節で述べるように、底本への對抗意識が强いのである。

六、三十卷本は簡本か

ここまで三十卷本の異質性について喋喋してきたが、所詮は簡本の一種に過ぎまいと訝る向きもあるだろう。しかし研究上、三十卷本を他の簡本と同列に論ずるのは問題がある。たとえば上述のように、三十卷本を除く簡本は冒頭の詞が異なり、移置閻婆をせず、關勝は落馬して死ぬが、それには理由があるからだ。

いわゆる繁本と簡本との違いは、單なる記述の繁簡や田虎王慶故事

の扱いには留まらない。エピソードの違いもある。たとえば何心『水滸研究』（上海古籍出版社、一九八四年。初出は一九五四年）や阿部兼也前掲論文が指摘する、林沖の妻の死の經緯である。繁本では分巻不分巻を問わず、梁山泊のトップが晁蓋になったのち、林沖は部下に妻の消息を調べさせ、彼女が高俅からの縁談を拒んで縊死したことを知る（容與堂本・三大寇本・遺香堂本第二十回4aなど）。だが簡本にこのような記述は無い（插增甲本卷四20a、插增乙本原缺、劉興我本卷四15b、漢宋奇書本卷十8b、評林本卷四22bなど）。といっても繁本で三百字近い關連の記述を單純に削ったわけではない。簡本では林沖が配流されるとき、すでに彼女は自害してしまったとするのである（插增兩本原缺、劉興我本卷二8a、漢宋奇書本卷五12a、評林本卷二11aなど）。

この配流のとき繁本では、妻は離縁を言われて昏倒するものの、息を吹き返している（容與堂本第八回5a、三大寇本第八回5b、遺香堂本第八回5bなど）。そして、じつは三十卷本でも、配流のときは昏倒にとどまり（卷三7a）、妻の死が描かれるのも繁本と同様、晁蓋の權力奪取後である（卷五20a）。

さかのぼれば高俅の登場に當たって、不遇の彼を助けたのは、繁本では淮西臨淮州で賭場を營む柳世權だが（容與堂本・三大寇本・遺香堂本第二回2bなど）、簡本では淮州の柳世雄とされる。生業は書いていないが（插增兩本原缺、劉興我本卷一5b、漢宋奇書本卷一16a、評林本卷一7bなど）、王慶故事にも高俅の恩人として出てきており、そこでは靈州靈壁縣の軍吏とされる（插增乙本・劉興我本・評林本卷二十一1a、漢宋奇書本卷四十七21bなど）。簡本が柳世權を柳世雄に改めたのは、王慶故事の增補に際して辻褄を合わせようとしたのであろう。だが地名の修整まで手が回らず、淮州と靈州という矛盾が殘った。ちなみに百二十回繁本の場合、王慶故事に柳世雄は登場しない。

三十卷本はどうかと言えば、前者は繁本と、後者は他の簡本と、それぞれ同じである（卷一5a、卷二十六1a）。これは第四節で述べた事情に由來するが、ともあれ柳世權と柳世雄が別人として登場する點も、他の簡本とは異なる。

このように內容的な違いが、三十卷本と他の簡本とのあいだにはいくつもある。そして、それは系統の違いを背景としている。

七、二十卷百回本について

三十卷本と他の簡本で、底本自體の內容が大きく違う可能性の有無を考えておこう。三十卷本以外の簡本はさかのぼってゆけば、いずれも後述するように繁本のうち二十卷百回本が底本となるはずである。ただ殘念ながら、現存資料は少ない。北京の國家圖書館が卷十・十一のうち合計8回分を有する『忠義水滸傳』（第四十七～四十九・五十一～五十五回）と、上海圖書館が卷十のうち2葉のみ、しかも右四分の一を缺いて藏する『京本忠義傳』（容與堂本第四十七回13a～14aと第五十回3a～4aに相當）くらいである。

後者の『京本忠義傳』から述べれば、その性格をめぐり諸說がある（白木直也「顧氏沈氏共著「關于新發現的〝忠義水滸傳〟殘頁」批判」、『東方學』第六十六輯、一九八三年。阿部兼也「『京本忠義傳』（水滸傳殘頁二葉）の性格」、『集刊東洋學』第六十一號、一九八九年。大內田三郎「『水滸傳』版本考―『京本忠義傳』について」、大阪市立大學『人文研究』第四十七卷第三分冊、一九九五年）。本文は字數が容與堂

本より一割ほど少ない。その眉批欄には各半葉に「石秀見楊林被捉」「祝彪與花榮戰」などと右横書きで大書され、『三國演義』の夏振宇本を想起させる版式だが、白木直也氏は上圖下文形式との關連を重視する。だとすれば、いわゆる繁本と簡本との過渡的段階を示す可能性もあるだろう。

殘存量が少なすぎるのは遺憾だが、三十卷本の底本でないとは言えそうである。三十卷本の卷十二10aには「剝得赤條條的、索子綁著」とあるのに、『京本』卷十17bにはこの10字が無いからである（なお『京本』卷十36bは三十卷本卷十二28aに對應）。

いっぽう前者の『忠義水滸傳』は容與堂本と對校しても、異體字や誤字脫字の類が目立つ程度の異同しか無いことが、論じられている（佐藤晴彦「國家圖書館藏『水滸傳』殘卷について―〝嘉靖本〟か？」、『日本中國學會報』第五十七輯、二〇〇五年。馬幼垣『水滸二論』前掲）。だがこの殘本8回に第四十七回が含まれるのは僥倖であった。『京本』殘葉と比べても、本文自體は特に取り上げるべき相違も無いが（16a～17a）、注目すべき點はべつにある。

いわゆる繁本と簡本のあいだでは、回の改めかたも異なる場合が存在する。たとえば繁本の最終回（第百回。百二十回本では第百二十回）は前回末尾に續き、故郷に錦を飾った宋江のところへ戴宗が訪ねてきた話から始まる。ところが簡本の最終回は、柴進が官職を辭すところから始まる。つまり簡本では、最終回の前の回で戴宗が宋江を訪ねて官を辭し、さらには阮小七も辭職するところまで話を進めているのである（插增乙本後述、劉興我本卷二十五16a、漢宋奇書本卷五十九17b、評林本卷二十五20bなど）。

また繁本第四十六回は、楊雄が知人と出會うところで終わり、それが第四十七回になって杜興であると明かされる。ところが簡本の對應部分では、もう少し話を進め、次の回は杜興が祝家莊について說明する所から始まる（劉興我本卷十5a、漢宋奇書卷二十二4bなど。評林本はこの2回を併合している。卷十6a～b）。

この2箇所のうち前者は、初期の簡本たる插增乙本でも確認できるが（卷二十五18a）、殘念ながら二十卷本のほうは該當箇所が失われている。いっぽう後者は插增乙本や同甲本では缺葉だが、幸い二十卷本『忠義水滸傳』は第四十七回冒頭を存しており、これは他の繁本と同じである。つまりこの2箇所を考え合わせることによって、回の改めかたはいわゆる簡本が變えたもので、底本たる二十卷本の段階では同じだったと想定することができる。

三十卷本以外の簡本の底本は、『京本忠義傳』の可能性もあり得るにせよ、結局は二十卷百回本にさかのぼる。その百卷百回本との相違點が卷數に留まると想定される以上、三十卷本と他の簡本との內容的な違いが、底本の段階で既にあったと考えることは、少なくとも現存資料からは、關勝の死以外については難しい。

八、『水滸傳』の版本系統

三十卷本以外の簡本が如何に生まれ如何に展開したか、また繁本はどうであったかについては、白木直也氏の見通しが大筋では有效であろう（『巴黎本水滸全傳の研究』著者自印、一九六五年）。最近の知見により補正しつつ、以下に敷衍したい。

二十卷百回本の存在は、李開先『詞謔』の「水滸傳委曲詳盡……且古來無有一事而二十册者」や錢曾『也是園書目』の「舊本羅貫中水滸傳二十卷」といった記錄、あるいは容與堂本第四十五回4aの「這上

三卷書中所說潘・驢・鄧・小・閑」云々が第二十四回21aに對應箇所を見出す點などからも伺われる。だが二十卷より百卷に分けるほうが分賣や貸し出しに便利であり、こちらが優勢となった。とはいえ百卷百回となれば、もはや分卷の意味が無い。かくて不分卷百回本が登場する。

この流れとは別に、二十卷百回本に田虎王慶故事五卷を加え、また各葉に插繪を入れる代わりに本文を簡略化した、全25卷から成る簡本が生まれる。これに對抗するかのように、獨自の田虎王慶故事を補った不分卷百二十回本も出現し、その動きの先に、後半を腰斬した七十回本も位置する。

ヨーロッパ各地に、「插增田虎王慶」などと各卷頭で標榜する上圖下文の『水滸傳』殘本が點在する。そのうちバチカン藏本は卷二十五の大尾をふくみ、これとドレスデン藏本を合わせて插增乙本と呼ぶ。征遼故事以前を缺くが、現存最古段階の簡本と目される。插增乙本は各葉の版心片側にしか插繪が無いぶん、記述は詳しい。また第四節で述べたように、余呈をあまり活躍させない。

シュツットガルト・コペンハーゲン・パリ・ロンドンには、「插增」を標榜し余呈の活躍も少ないが、版心兩側ともに上圖下文の殘本が藏され、插增甲本と總稱する。これら插增本を博搜した馬幼垣氏は、また長澤規矩也舊藏の劉興我本や森鷗外舊藏の藜光堂本およびドイツに複數存する類似の簡本を、上圖の左右にも本文が入る版式の特徵から嵌圖本と總稱した（『水滸論衡』聯經出版、一九九二年。同、三聯書店、二〇〇七年）。嵌圖本も全25卷から成る。これらの新出資料と、評林本における余呈の描きかたなどを比較することで、插增本（とくに乙本）から嵌圖本（とくに劉興我本）をへて評林本に至る3段階の繼承關係が浮かび上がった（馬幼垣前揭『水滸二論』。氏岡眞士「影印插增乙本《水滸傳》缺葉補遺」、信州大學『人文科學論集〈文化コミュニケーション學科編〉』第四十一號、二〇〇七年）。ただし簡本の系譜は、それだけには留まらない。

九、縮寫本という範疇

評林本は、武松の苦境を救う孔目の姓を葉ではなく余とする點でも『二刻英雄譜』と竝ぶ特殊なテキストである（『水滸二論』）。むしろ第2段階たる嵌圖本のほうが、まだ普遍性を有している。ただ嵌圖本は百十五回で終わるが、本文では第九回の表示と回目が脫落している。北京の國家圖書館には、十卷百十五回本が藏され、こちらは第九回もちゃんとある。ただこのテキストは全體として見た場合、殘念ながら破損箇所がかなり多い。ところが幸いにも、『漢宋奇書』に收める百十五回本がこれと同系統なのである。そしてこれらは嵌圖本と相補う內容を有し、どちらかといえば敍述が詳しい（氏岡眞士「兩種〝出像〟本《水滸》在百十五回諸本的位置」、『中國古典小說研究』第十五號、二〇一〇年）。

十卷本の流れを汲むのが八卷百十五回の『水滸傳』である。この八卷本は、本文が非常に簡略で、插詞も殆ど削っている。その點では三十卷本と似ている。ただし回數回目は略されていないし、簡略化の具體相も三十卷本とは異なる（氏岡眞士『中國古典小說研究』第十五號所收論文）。なお北京大學圖書館は八卷本を複數所藏し、一本に「光緒寅壬」（ママ。二十八年、一九〇二）の封面がある。

本文が簡略で插詞も殆ど削った『水滸傳』としては百二十四回本もある。簡略化のあり方は、三十卷本とも八卷本とも違っており、かつ

百二十四回という總回數は、插增乙本が全百二十三回と推定されるのに近い。刊行時期は、信州大學附屬圖書館藏の大道堂刊本封面には、光緒己卯（五年、一八七九）とある（氏岡眞士「百二十四回本『水滸傳』について」、『汲古』第五十六號、二〇〇九年）。

この百二十四回本や上述の十卷本・八卷本は、いずれも康熙のころの杭州のひと陳枚の序を有する。ただ十卷本は、『北京圖書館古籍善本書目』によれば清初德聚堂文星堂刻本であるが、この序にその頃の記年があるか否かは破損のため不明である。また八卷本は年代を記さない。そして百二十四回本の場合は筆者の知るかぎり、いずれも乾隆の年號を記している。

百二十四回本も底本は百十五回本と目されるが、『漢宋奇書』と劉興我本の雙方に通ずる特徵を有する。底本は百十五回本の原型に近いものと考えられ、それだけ長期にわたり流傳してきたことが窺われる（氏岡眞士「試探百二十四回本《水滸》的底本」、信州大學『人文科學論集〈文化コミュニケーション學科編〉』第四十五號、二〇一一年）。八卷本の存在も考え合わせれば、後者の成立時期が遲いとしても、清代において非常に簡略化された『水滸傳』への需要が存在したことが讀み取れよう。

三十卷本にも長期の流傳が窺えることは既に述べたが、ただ八卷本や百二十四回本の場合は、簡本をさらに簡略化している。繁本を簡略化したのが簡本と見なすなら、この2種は簡本ではない。とはいえ兩者とも、二十卷百回本以來の繼承關係を有しており、けっきょく三十卷本以外のいわゆる簡本は、すべて一族をなす。內閣文庫藏本系の容與堂本から一氣に著しく簡略化され獨自の改變を施された三十卷本だけが、異端兒なのである。

こうした系統のちがいを踏まえたうえで、あえて他の諸本に比しての簡略化の甚だしさを重視すれば、繁本でも簡本でもない縮寫本という範疇をたてることができよう。插增甲本のほぼ一葉にあたる542字の描寫が、插增乙本では592字使って描かれるのに對して、三十卷本は382字、百二十四回本は388字、八卷本は344字にすぎず、評林本などその他の簡本はほぼ插增乙本に同じ、という試算もある（馬幼垣「南京圖書館所藏《新刻出像京本忠義水滸傳》考釋」、『水滸二論』前揭）。だからといって簡本を5種類に細分するより、むしろ三十卷本・八卷本・百二十四回本の3種を一括して縮寫本と捉えるほうが有意義だと考える。

と言うのも、これらはいずれも清印本であり、『水滸傳』の歷史は金聖歎の腰斬で一段落、というような通念を疑うに足る存在だからである。七十回本の壓倒的なプレゼンスを否定はしない。ただいわゆる簡本以上に簡略な縮寫本が存在し長期にわたり流傳したことは、金聖歎的な好尙とは異なる讀者層が一定の數で存在したことを物語るのではないか。

後述の『征四寇』にしても、金聖歎が切り捨てたはずの文學的に劣ったとされる後半部分が、しかも文學的に劣ったとされる簡本を底本として息を吹き返したのである。その讀者は、手輕な縮寫本の支持層と重なるであろう。

通俗文藝の受け手は二層に分かれる。たとえば『紅樓夢』も『說唐全傳』も十八世紀清代の白話小說だが、讀者層は明らかに異なる（小松謙『「現實」の浮上―「せりふ」と「描寫」の中國文學史―』汲古書院、二〇〇七年）。そのような見方は、『水滸傳』という一つの作品に卽しても有效ではないだろうか。

十、鄭振鐸と三十卷本

『水滸傳』における繁本・簡本の稱は、魯迅『中國小說史略』第十五篇「元明傳來之講史（下）」に由來する。魯迅は、胡適の研究を批判的に繼承しつつ、あくまでその範圍で『水滸傳』は簡本が繁本に先行すると說いたのであった。胡適が百回本を、百十回本・百十五回本・百二十四回本および『征四寇』よりも古いと考えたので（「水滸傳後考」、『中國章回小說考證』上海書店、一九八〇年。初出は一九二一年）、魯迅は百回本を繁本と呼び、百十回本以下を簡本と一括したうえで反論したにすぎない。引用される胡應麟『少室山房筆叢』卷四十一も、最近の『水滸傳』は古いものから粗筋以外を削ってしまっていると書くだけで、繁本・簡本の語は使っていない。なお『征四寇』は宋江たちが遼・田虎・王慶・方臘を征伐する全49回の話で、百十五回本の後半を獨立させており、七十回本の結末を無視すれば、その續編として讀める內容になっている（馬場昭佳「淸代における『水滸傳』七十回本と征四寇故事について」、『東京大學中國語學中國文學研究室紀要』第七號、二〇〇四年）。やはりそのような讀者層を對象にしたものといえよう。

繁本・簡本の概念を擴張したのは鄭振鐸である。『水滸傳』の原本が二三倍に「放大」されたのが繁本であり、原本や「放大」されていないのは簡本だ、と斷じた（「水滸傳的演化」、『中國文學研究』前掲。初出は一九二九年）。のちに鄭は、繁本の方が原本だと言い出すが（「水滸全傳序」、『鄭振鐸古典文學論文集』上海古籍出版社、一九八四年。初出は一九五四年）、それより興味深いのは鄭振鐸のいう簡本に、彼がパリでみた三十卷本も含まれていたことである。その序には繁本という言葉が使われており（10b～11b）、鄭が魯迅の概念を「放大」するうえで影響を與えたふしがある。

余近歲得水滸正本一集，較舊刻頗精簡可嗜……安知全本顯而贋本不晦，全本行而繁本不止乎。

（私は近頃『水滸傳』の正本一揃いを得たが、舊刻より簡にして要を得ており味がある……この全本が名を揚げて贋本が姿を消さず、全本が普及して繁本が廢れないことがあろうか）

三十卷本は自らを「正本」「精簡」にして「全本」と誇る。いっぽう「贋本」「繁本」と攻擊する對象は、「舊刻」こと底本たる容與堂本であろう。ここから讀者層が一つでないことも窺える。

ともあれ鄭振鐸ほど單純に『水滸傳』諸本は二分できなかった。移置閻婆にせよ關勝や余呈の死にせよ高俅や武松の恩人にせよ、あるいは林沖に關わるエピソードや冒頭の詞にしても、單に字數が二三倍か否かでは見過ごされがちな特徵である。しかしそれらを手がかりにして初めて、『水滸傳』諸本の複雜な關係は解きほぐされ、三十卷本の異端兒たることも明らかになるのである。

※本稿は、科學研究費補助金基盤研究（C）「文簡本を中心とした『水滸傳』の研究」の成果の一部である。